

第 12 回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「はじめの一步」

東京都 白百合学園高校 2 年 関 菜々美



賢 治 の ま ち か ら  
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『はじめの一步』

東京都 白百合学園高等学校二年 関 菜々美

「おはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

週番の六年生と、元気な声で挨拶をする下級生の声が聞こえてくる。高い所と低い所から響く挨拶が丁度ぶつかり合う辺りを、軽く頭を下げながら通り抜ける。五年生にもなると大きな声で挨拶する人はほとんどいない。ただ上級生は怖いから、何となく頭を下げて通り過ぎるのだ。

「結衣！」

突然ランドセルを後ろから叩かれる。

「昨日のメール見たあ？」

同じクラスの彩希だ。

「ああ、ごめんごめん。返事ははぐっちゃった」

「もう！ いい加減なんだから。それにしてもさ、昨日もみやっち、めっちゃかっこよかったよねえ」

「うん、マジヤバかった！ 彩希は本当みやっち好きだよね」

毎朝こんな会話が繰り返される。ドラマの話やアイドルの話。本当はそんなことどうでもいい。はつきり言ってしまうえば興味がない。でも「みんなに合わせる」ために、この話題は今必要不可欠なのだ。

教室で集まって話していると

「ガラガラガラ」

平野さんが入って来た。教室中が一瞬沈黙になる。私は、平野さんと目が合わないようにさっと視線を逸らす。彼女が席に着くと、教室中に音が戻ってくる。毎朝起こる何ともおかしな光景だ。授業中の回し手紙も、昼休みのドロケイも、理科の授業での実験も、まるで彼女はいないかのように色々なことが過ぎていく。



放課後、掃除当番が終わって教室に戻ると丁度平野さんが下校するところだった。

「何それ、最近よく持ってるよね」

彩希が平野さんの背中を覗きこむ。

「……」

彩希が勢いよく本を取り上げる。

「何これ、絵本じゃん！ 五年にもなってまだ絵本読んでるなんて、恥ずかしいくないの？」

「……」

「あっ、分かった！ 平野さん、これ寄付するために持って来たんでしょ。ね、そうだよな？ 高学年にもなって、絵本なんて読むわけないもんね？」

「う、うん……」

「図書委員……結衣じゃん！ ほら」

本が私に向かって放り投げられる。慌ててキャッチすると、彩希が教室の外を指差した。

「これ寄付だって。よかったね。早く図書室の箱に入れて来てあげなよ。ね、平野さんそうだよな？ ちょっと臭いかもしれないけど、無いよりいいでしょ」

一瞬、私は平野さんのほうを見た。不安でいっぱい目の瞳の中に、少しだけ期待が混じっているような気がした。私は、震える手を抑えて教室のドアを開ける。怖くて、平野さんの顔を見ることが出来なかった。

「ほら、早く行って来て。私今日急いでるんだから。三十秒以内ね。いち、にーい、さーん……」

「分かった分かった。すぐ行って来る」

図書室に入ると、残っている人は誰もいなかった。図書カウンターの中に、被災地の子供達に贈るための本を集める箱が置いてある。私は本を持った手を箱の前に出しては引っ込め、出しては引っ込めを繰り返した。

「結衣何やってんの？ 遅いじゃん」

びっくりして手を放してしまった。本が勢いよく落ちる。

「ほら、帰るよ」

「う、うん」



彩希からランドセルを受け取り歩き出す。

さつきから、あの本のが気になって気になって仕方がない。

「今日はドラマも歌番組も、見るもの色々あって大変だね。ねっ？」

「結衣ってば！ ねえ、聞いている？」

「あ、ごめん。そうだね」

「何ボウツとしてんのよ。まったく」

「：あっ！ 私、忘れ物してきちゃった。ごめん」

「えっ、何忘れたの？ 明日でいいじゃん」

「宿題のドリル！ あと一回忘れたらトイレ掃除になっちゃうよ」

「もう、バカじゃん。じゃあ先歩いてるからね」

彩希のランドセルが校門を曲がると、私はホッと息をついた。

「付いてこられたらどうしようかと思った」

振り返って一目散で学校へと戻る。階段を駆け上がって図書室へ飛び込むと、カウンターの箱に向かって突進する。もう最終下校の音楽が鳴り始めている。

「あっ、あった」

本が、半開きの状態で箱のふちに引っかかっている。取り上げてみると、真ん中辺のページが少し破れているのに気が付いた。急いでランドセルを開けて本をしまう。

「あら、遅くまでお仕事？ お疲れ様。でももう最終下校の時間過ぎちゃうわよ」

担任の先生が、私を見つけて声をかけてくれた。

「あ、はい、ちょっと忘れ物しちゃって。もう帰ります」

ランドセルをしょって走り出す。校門を出ると、そのまま家まで脇目も振らずに走った。

彩希のことなどすっかり忘れていた。

「ただいまー」

「お姉ちゃんおかえりー」

恵美が玄関に飛び出して来る。

「今日のおやつはケーキだよ。早く食べよ」

「遅くなっちゃった。ごめんね。拓也は？」



「お兄ちゃんはもう食べちゃったよ。でもね、えみはちゃんと待ってたの。お姉ちゃん嬉しい？」

「うん、ありがとう。嬉しいよ。手洗ってくるからちょっと待っててね」  
ランドセルを玄関に置いたまま、急いで手を洗って席に着く。

「えみね、今日もね、りえちゃんといっぱい遊んだんだよ。縄跳びしたの。えみね、あやとび出来るようになったんだよ。すごいでしょ？」

「すごいね。えみはりえちゃんと一番仲良しなんだ」

「うん！ このお洋服、後で見せに行くんだ」

「可愛いね。新しい服買ってもらったんだ」

「ううん。これね、今日まこちゃんのお母さんが持ってきてくれたんだよ。

まこちゃん、妹いないでしょ。だからえみに着てほしいって」

「……そ、そうなんだ」

「このお洋服ね、すっごくいいにおいがするんだよ。お姉ちゃんかいてみて」  
「う、うん。そうだね」

「お日様の光をいっぱい浴びて育ったお花の香り」みたいでしょ」  
「何それ？」

「さっきね、お母さんがそう言ってたの。まこちゃんのお家ではどんな洗剤を使ってるのか、お姉ちゃんに聞いて来てもらおうかしらって言ってたよ」

恵美の服からは、本当にいい香りがしている。昔からずっと変わらない、眞子ちゃんの匂いだ。そう、眞子ちゃんが臭いはずがない。私達が小さい頃、いっぱい汗をかきながらどろんこになって遊んだ後でも、眞子ちゃんからはこのいい香りがしていた。

「あっ！ まこちゃんにお礼言おうと思ってたのに。お姉ちゃん、今日まこちゃんと一緒じゃなかったよね。お休みだったの？」

「違うよ。最近是一緒に行ってないだけ」

「何で？ お姉ちゃん、まこちゃんとケンカしちゃったの？」

「いや……そういうわけじゃないけど……」

「仲間外れってやつだよ。一年生のお前には分かんないだろうけどさ」  
弟の拓也が、いつの間にか二階から降りてきていた。

「なかまはずれってなあに？」



「“イジメ”ってやつだよ。一緒に遊ばないとか、一緒に帰らないとか、そういうことだろ？ 姉ちゃん」

「拓也！ お姉ちゃんはそのなことして……」  
その先が続けられなかった。

「何で？ まこちゃんは“イジメ”られてるの？ 何か悪いことしちゃったの？」

「いや……。その……」

そうだ。眞子ちゃんは何も悪いことなんてしていない。

今年の四月、私達は五年生になった。新しいクラス、新しい担任の先生、新しくなった授業に、学校中が沸き立つ日だ。そして「係決め」。新年度最初の一大会イベントである。まずはクラス委員。男子は学年でも成績トップの菊地くん。女子は昔からこの学年を仕切っている彩希に決まった。二人ともいわゆる常連メンバーだ。そして、書記、放送委員、風紀委員、図書委員といった感じでどんどん決まっていた。

「女子の飼育委員が残ってるんですけど」

菊地くんがメガネの奥で眉をひそめている。昔は「生き物係」というって大人気の係だったが、「臭い」「汚い」「面倒くさい」という理由から、最近では避けられるようになっていた。

「飼育委員なんて、みんな嫌だよねぇ？」

彩希がクラスを見渡す。みんなが苦笑いを浮かべながらうなずき合う。

「……私、やってもいいけど……」

彩希の目がパツと止まる。手を挙げたのは……眞子ちゃんだ。

「飼育委員 平野」

黒板に眞子ちゃんの名前が書かれる。この時から“眞子ちゃん”は“平野さん”に変わった。数日後、教室に入ってきた眞子ちゃんを見て、クラスメイトの一人が言った。

「やだ平野さん。肩に草のっかっている。しかも、何かちょっと臭いし」

「今朝ウサギのエサ箱ひっくり返しちゃって……」

「うわっ。くっせーくっせー」

男子がふざけて鼻をつまみ、教室中を走り回る。

「やめなよ。男子はほんとお子ちゃまなんだから」





そういう彩希は、女子の輪の中に戻って来てこう呟いた。

「でも確かに、ちょっと臭いよね」

みんなが平野さんと話さなくなったのはこの日からだ。そう、眞子ちゃんは悪いことなんて何もしていない。

「女子ってほんと、そういうところ陰険だよな」

拓也が言った。

「そんなの差別よ。男も女も関係ないでしょ。だいたい、臭い臭いって大騒ぎしたのは男子なんだから」

でも言われてみれば確かに、男子が眞子ちゃんのことをからかっていたのはあの時だけだ。

「ふーん……変なの」

心底不思議そうな顔をして恵美がそう呟いた。その一言が、私の胸に突き刺さる。小学校に入ったばかりの子にさえ分かる“おかしいこと”を、私達は毎日当たり前のようになっているのだ。

「みんな、まこちゃんのこと嫌いななの?」

「いや、嫌いってわけじゃないけど」

「どうしてまこちゃんとお話しないの?」

「だって、みんなそうしてるから」

「みんながまこちゃんと仲良くしないと、お姉ちゃんも仲良くしないの?」

「いや、そういうわけじゃ……」

何だか、被告人席に立たされてみんなから石を投げられているような気分になった。自分達は「上履きに画びょうを入れる」とか、頭からバケツの水をかける」とか、そういうことをしているわけではない。ただ、まるで眞子ちゃんがそこにいないかのように話したり、遊んだりしているのだ。だから、今日のような事件には私も正直驚いた。

「……ごちそうさま」

ランドセルを取って二階へ上がる。荷物を床に放り投げると、そっと本を取り出した。

「『おのきなほむ』?」

表紙にはきれいな鳥の絵が描いてある。表紙を開くと、その絵本はなぜか真っ黒いページから始まった。



「何これ？」

「どんどんページをめくっていく。」

『にわたりのコッコは、おさんぽのとちゅう、おおきなあなにおっこちてしまった。あなのなかは、くらくてなにもみえない。コッコはこわくて、さみしくて、すわりこんでなきだしてしまった。』

「何この話。眞子ちゃんってこんなに子供っぽかったっけ？」

『おかあさん、おとうさん！ コッコ、なんにもわるいことしてないよう。おかあさんにかわいいおはなをあげようとおもって、やがしにきたんだよう。なんでこんなことになっちゃったんだよう。どうしたらいいの？』

「一つ一つの言葉がまるで自分に言われているかのように、頭の中をグルグルとめぐる。」

『すると、コッコのうしろからやさしいこえがきこえてきた。』

『だいじょうぶだよ、コッコちゃん。ずっとうえのほうにひかりがみえるでしょう。そこにむかってとぶんだよ。そしたらすぐにでられるからね。』

『だって、コッコのはねはとべないんだよ。なんかいばたばたして、いままでとべたことないもん。』

『だいじょうぶ。わたしがついていってあげるからね。はねをひろげてごらん。そうしてほら、うごかしてごらん。』

『コッコはこわくてめをとじたまましばらくはねをうごかしていました。すると、』

『コッコー！』

『おかあさん！』

『しんぱいしたのよ。なかなかかえってこないから。』

『ごめんなさい。コッコ、おかあさんにきれいなおはなあげようとおもって。』  
『ありがとう。でもきをつけなくちゃだめですよ。おはなは、こんどおかあさんといっしょにさがしにいこうね。』

『うん。』

『コッコがうしろをふりかえると、さっきまであながあったところに、きれいなきれいなおはながさいていました。』

「途中ページが破れているところがあつたが、最後まできちんと読めた。」

「こんなになっちゃったから、やっぱり買い直したほうがいいかな」





本を閉じようとする、裏表紙の内側に、黒い太字で何か書いてあるのが見えた。

『眞子ちゃん

ご入学おめでとう。今日から一年生。お友達とケンカすることもあるかもしれないけれど、きつとすぐに仲直りできますよ。それがお友達です。それに何があっても、眞子にはいつもおじいちゃんもおばあちゃんも、お父さんもお母さんも、みんな付いていますからね。

おばあちゃんより』

短いメッセージだったが、私は鼻の奥がツンとするのを感じた。ポトンツと涙がこぼれ落ちる。何だか、自分という人間に腹が立ってきた。昔はあんなに仲良くしてたのに、自分がいじめられたくないから、仲間外れにされるのが怖いから、眞子ちゃんと話しさえしなくなっていた自分。今まで何度眞子ちゃんを傷付けてきたか……。そう考えただけで、胸が苦しくなった。しばらくの間座り込んで頭を抱え、私は泣き続けた。

ついに顔を上げた私は、何とか元の形に戻そうと、破れてしまったページを丁寧にセロハンテープで貼り付け始めた。

「出来た！」

立ち上がると、私は本を脇に抱えてそのまま走り出した。

「ちよっと行って来る」

「お姉ちゃんどこ行くの？」

「すぐ帰るから」

それだけ言って家を飛び出した。息を切らしながら、眞子ちゃんの家まで全速力で走る。立ち止まって、門の前に立つ。眞子ちゃんの家ドアが、前よりずっと大きく、立ちはだかる壁のように見えた。勇気を出してチャイムに手を伸ばす。

「ピンポーン」

「はい」

大きな壁が動いて、おばさんが顔を出す。

「……こ、こんにちは」

「あら結衣ちゃん。久しぶりね。何だかまた背が伸びたんじゃない？ ちよっと待っててね。眞子ー。結衣ちゃんよ」



胸がドキドキする。心臓が飛び出してしまいそうだ。前はしょっちゅうこうして遊びに来てたのに。徐々に徐々に、足が後ろに下がって行ってしまふ。一度閉じたドアがもう一度開いて、中から眞子ちゃんの顔が覗く。

「……結衣ちゃん、どうしたの？」

なかなか話し出すことが出来ない。私は手と足にグツと力を入れて一歩大きく踏み出すと、後ろに持っていた本を眞子ちゃんに向かって勢いよく差し出した。

「えっ」

「あのね、これ。ちょっと破れちゃって……。貼って見たんだけど……」

「あ、ありがとう」

本が静かに私の手を離れる。

「あのね、本当に……ごめんね。……あんなことしちゃいけないって分かってただけけど、みんなの前ではそれがちゃんと言えなくて……。本当にごめんね。……じゃあね。」

ずっと黙っている眞子ちゃんに、ゆっくり背を向ける。謝ったからといって、そんなすぐに許してもらえないはずがない。小さく二、三步歩き始める。

「……結衣……ちゃん」

「えっ？」

「また、あ……ううん。じゃあね」

「う、うん」

歩き出した足をもう一度止めて、後ろを振り返る。

「あの……眞子ちゃん……明日……朝一緒に行かない？」

「え？」

「いつもの曲がり角で、私待ってるね」

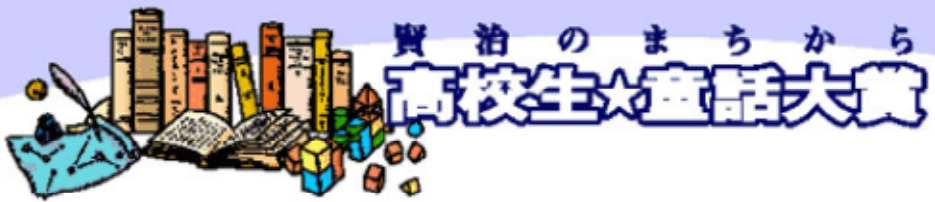
「う……うん。じゃあ……また明日！」

「うん！ また明日」

くるっと向きを変えて、大きく一歩踏み出した。立ち止まって空を見上げる。いつもずっと遠くにあるお日さまが、何だかすごく近くに見える気がした。

「いいお天気！ 明日も晴れるといいな」

大きく一回、深呼吸する。



「お日様のいい匂い！ 明日も晴れるといいな」

眞子ちゃんの笑顔が、眩しい太陽の光の中でパツと開いたように見えた。明日からどうなるか分からない。でも、まずは私に出来ることから始めればいいのだ。

「はじめのいっぽー！」

そういって、グンツと前に跳び出した。太陽めがけて、全速力で走り始める。心地よい風が吹き抜けて、私の頬にのった小さな水の珠がパツとはじけるのが分かった。